

研究ノート  
下田歌子再考——評伝作成のために(一)

高瀬 真理子

実践女子学園の創始者である下田歌子について、本格評伝の作成が待たれて久しい。しかし、そもそも明治から昭和前期の著名な女性であった彼女は、どのような描かれ方をしてきたであろうか。

小説としては、明治二十一(一八八八)年、三宅花圃の『蕨の鷺』や明治四十三(一九一〇)年から明治四十四(一九一一)年にかけて発表された森鷗外の『青年』では、さらりと描かれ描かれているものの、どこか当時の一般女性とは、明らかに違って抜きん出ている描写が見られる。ところが、太平洋戦争後、戦前までの価値観が敗戦によって全く覆った現代においては、昭和五十(一九七五)年、井上ひさし『合牢者』、昭和五十九(一九八四)年、志茂田景樹の『花の嵐——明治の女帝・下田歌子の

愛と野望』、平成二(一九九〇)年、林真理子の『ミカドの淑女』、平成六(一九九四)年、南條範夫の『妖傑 下田歌子』、平成十(一九九九)年、山本博雄の『妖婦 下田歌子——「平民新聞」より』、平成十二(二〇〇〇)年、三好徹『妖婦の伝説』などの作品の登場を見ている。いわゆる「平民新聞」や当時のゴシップ等の資料を用いた小説等が多く出現する。おそらく、帝国婦人協会や愛国婦人会の重鎮として活動していたものが、歌子の没後、国防婦人会の勢力拡大の影響を受け、いわゆる婦人会そのものが、軍国主義に飲み込まれたネガティブな歴史認識の影響も受けていると思われる、男尊女卑がまかり通っていた中で、女子は結婚して夫の庇護の下にあらねばならない時代に、美子皇后に実力を見いだされて男性と互して以上の働きがあったが故に、

中傷にさらされたものでもあった。また、品格を重んじるが故に、これらのゴシップ等が面白おかしく出される中で、毅然として沈黙を守ったことが、放置したと同様の結果も招いてしまっているように思われる。

ところが、最近、男女共同参画が進み、時代に変化が見られるためか、歌子の業績を再評価する内容が出るようになってきた。平成二十六（二〇一四）年、仲俊二郎『凜として——近代日本女子教育の先駆者下田歌子』や平成二十七（二〇一五）年、浅見雅男の『学習院』、平成二十八（二〇一六）年、みのごさく『日英同盟カゲの立役者 下田歌子』、長尾剛の『近代日本を創った7人の女性』、平成二十九（二〇一七）年、石川真理子の『乙女の心得——世界が恋した日本女性』のような書籍である。

一方、評伝としては、昭和十一（一九三六）年、西尾豊作の『下田歌子伝』、昭和十八（一九四三）年、故下田校長先生伝記編纂所による『下田歌子先生伝』などが早期のものとして存在する。特に『下田歌子伝』については、歌子没年の成立であり、同時代にあつては評価できるものである。しかし、その後に『下田歌子先生伝』の成立があり、本格評伝として認識することは逆に難しくなる。つまり、「平民新聞」に代表されるような下田歌子バッシングに対抗する意味合いがあつたのかもしれないが、カリスマ性のあつた下田歌子を必要以上に祭り上げる姿勢のものであつた。

それは、昭和十二（一九三七）年、香雪神社大殿祭が千家尊宣によつて斉行され、下田が神格化されたことも関係があると考えられる。そのことは、とりもなおさず下田がそれほどの存在であつたことの証左でもあり、女性としては、まったく稀な存在であつたとも言ふことができよう。しかし、皮肉なことに、神格化されることによつて等身大の下田歌子を知ろうとする機会が奪われることにもなつてしまつたのである。

昭和二十一（一九四六）年、文部省（当時）の指示により香雪神社が廃祀となる。その後、下田歌子について長く語り難い時代を経たが、女性の活躍が目される時代を迎え、再び一人の先駆的な女性として、下田歌子の生き方や業績を再評価していく必要性が増している。

従つて、本研究では、評伝作成のための資料として、下田歌子の生涯を概観することを目的とし、下田が生きた時代の女性の地位や置かれた状況等にも細かく配慮して考察を加え、また最近、新資料の出現によつて見直されている幕末維新の研究にも目を向け、資料を駆使して下田歌子の生き方や業績を再評価しながら評伝として組み上げていくことを最終目標としたい。

つまり、この稿では、改めて下田歌子の血統について整理し、『下田歌子』となる以前の「平尾鉦」の背景を固めておきたい。また、この先、改訂を続けることは辞さないものの、現段階までの時代

背景を付した下田歌子の年譜資料（明治十二年まで）を評伝作成の基礎資料として掲げておきたい。

## 二、年譜

下田歌子の年譜の明治十二年までを整理し、年表としてまとめた。

『下田歌子伝』の巻末資料と『下田歌子先生伝』に縷々述べられている血統を家系図に起こしてみたものの違いは、下田歌子のとらえ方そのものと密接につながっている。

## 一、家系図

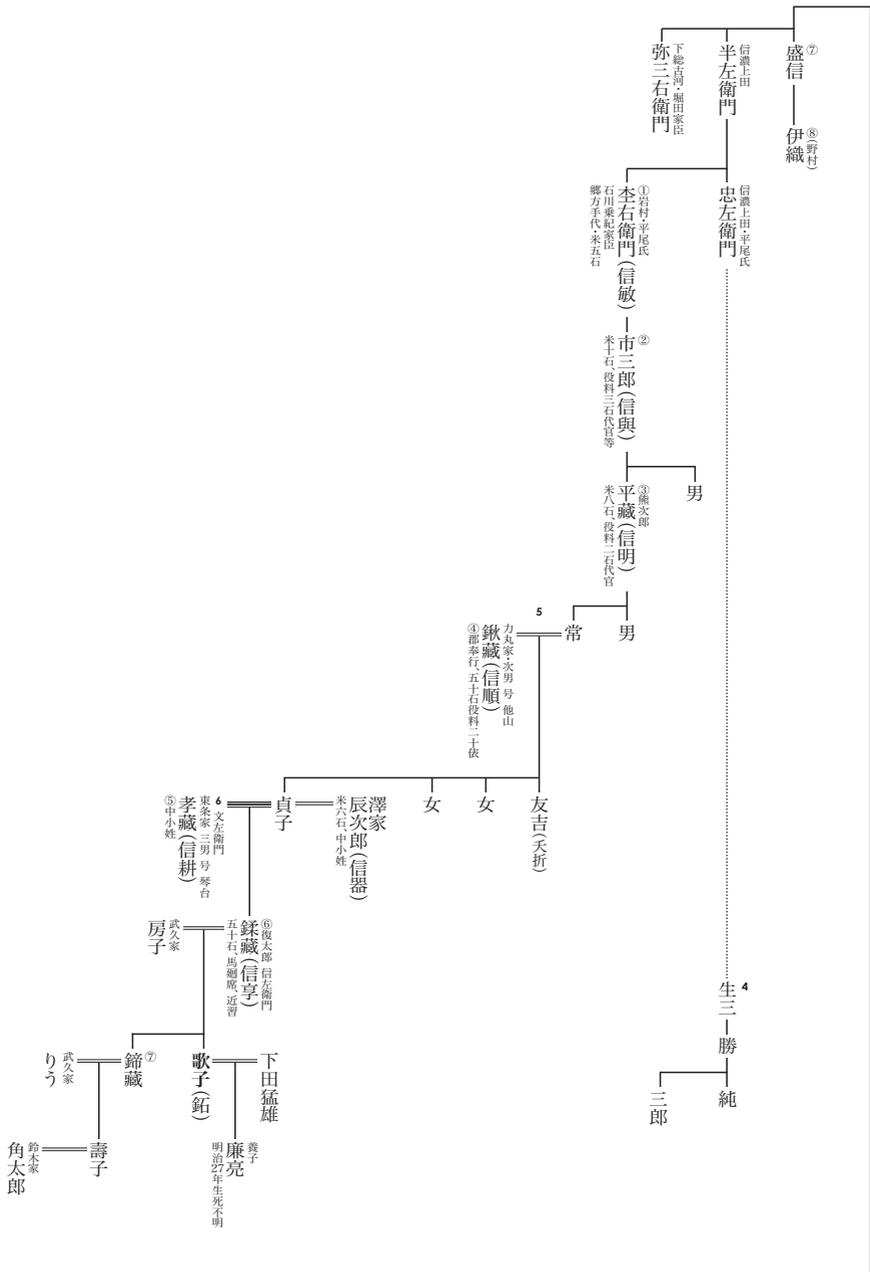
この家系図については、『下田歌子伝』『下田歌子先生伝』を基底に据えながらも、『姓氏家系大辞典』『國史大辞典』『幕末維新人名辞典』『明治維新人名辞典』『日本史小百科』で照合・修正することによって客観性を保ちながら、糊澤龍吉『平尾守芳とその一統』、中村勝実『疾風武田軍団』、山口典子『平尾它山略記』（『りんどろ』第2号 一九七七年）等も含めて照合した結果を次頁に示す。

なお、これら家系についての考察の詳細は、拙稿「下田歌子再考——血統と家系について——」（『歌子』第5号 一九九七年3月）を参照されたい。

明治五年までのところは、月日の表記に太陰暦を用いているものが多い。下段の一般社会に関する記事は、すべて太陽暦に揃えることができたが、上段の下田歌子や一部岩村のものについては混在しているとかわざるを得ず、確認がとれたものから、この先も太陽暦への修正統一を加える必要がある。

この年譜については、全体を『近代日本総合年表』（一九九一年 岩波書店）、『日本文化総合年表』（一九九〇年 岩波書店）を基底に据え、上段の項目については、西尾豊作『下田歌子伝』（一九三六年 咬菜塾）、『下田歌子先生伝』（一九四三年 故下田校長先生伝記編纂所）から採用しつつも、飛鳥井雅道『明治大帝』（一九八九年 筑摩書房）、アリス・ベーコン『華族女学校教師の見た明治日本の内側』（一九九四年 中央公論社）、『津田梅子文書』（一九八〇年 津田塾大学）、小田部雄次『ミカドと女官』（二〇〇一年 恒文社21）、大庭みな子『津田梅子』（一九九〇年 朝日新聞社刊）などの関連資料からも採用している。





歌子(岩村藩)

▼1854(安政元)年 当歳 藩主 松平乗高

8・8 岐阜県美濃国恵那郡岩村町大字熊の原、岩村藩士平尾家にて、父、平尾信左右衛門信享、母、房子の長女として誕生。  
幼名、せき(鉞)。

▼1855(安政2)年 1歳 藩主 松平乗命

7・26 藩主、松平乗高(30歳)没。

9・18 松平乗命(8歳)遺領を継ぐ。

▼1856(安政3)年 2歳

社会・世界の動き

孝明天皇 将軍十三代家定

2・13 ペリー(軍艦七隻)、江戸湾内に投錨。

3・28 クリミア戦争始まる。

3・31 日米和親条約を結ぶ。

5・2 京都大火、内裏炎上。

10・14 日英和親条約を長崎で結ぶ。

12・23 東海地方で大地震。

2・7 日露和親条約を下田で結ぶ。

11・11 夜、江戸で大地震、余震八十回、火災各地。(安政大地震)

11・18 幕府、堀田正睦を老中首座に任命。

12・3 幕府、長崎で海軍伝習を開始。(伝習員、勝安芳ら)

1・30 日蘭和親条約を長崎で調印。

3・17 幕府、洋学所を設立、蕃書調所と称する。

8・21 米国総領事ハリス、下田に入港。

9・20 吉田松陰、近隣の子弟に講義。(松下村塾の起源)

9・23 江戸大風雨、洪水。

▼1857(安政4)年 3歳

せき子、この頃より、俳句、和歌を口ずさむ。  
父、信左右衛門、眼病治療のため、御暇を願ひ出る。

▼1858(安政5)年 4歳

1・1 せき子、正月に歌が、きたと祖母の部屋に駆け込んで、口頭で歌を詠んだ。

6・11 父、信左右衛門、思慮不行届の次第恐入差控。

父の謹慎に伴い、従者のすべてに暇を出し、食事も茶漬けと漬物で節約を始める。

この頃、祖母、貞子から平尾家の先祖が南朝の忠臣であることと尊皇思想について教えを受け、幽閉されている父の正しさを説き聞かせられる。

10・8 清でアロー号事件。  
(和歌)八田知紀『しのぶ草』

2・12 蕃書調書開校、幕臣の子弟のみ入学可。

2・24 オランダ商館長クルチウス、幕府にアロー号事件を報ずる。

5・4 幕府、軍艦教授所を設置。

5・10 インド独立戦争。(セポイの反乱)

9・20 英軍により、ムガル帝国滅亡。

10・16 日蘭追加条約。(事実上、初の通商条約)

12・7 ハリス大統領親書を渡し、幕府に通商開始の必要性を説く。

將軍十四代家茂(11・30—)

6・4 彦根藩主、井伊直弼が大老となる。

6・ 清、露米英仏の四力国と天津条約を結ぶ。

6・ 長崎でコレラ発生、全国に流行。(江戸の死者三万人余)

7・ 幕府、長崎に英語伝習所を設立。

7・29 勅許のないまま日米通商条約に調印。

8・2 英、インド統治法を公布し、直轄統治する。

8・14 將軍家定(35歳)没。

8・ 蘭、露、英と修好通商条約に調印。

9・14 違勅調印に関する密勅が水戸藩に下る。

10・ 安政の大獄始まる。

10・ 福沢諭吉、蘭学塾開設。

▼1859(安政6)年 5歳

4・末 せき子、お節句の幟を詠えて欲しいと言ったり、男になりたいと言う。

5、6歳の頃、父、信左右衛門、せき子の神童ぶりを祖父、東條琴臺に書き送ったところ、返書に女子の為すべきところをさせるようにとあり、せき子の読書が禁じられ、裁縫、灑掃に力を注がせるようになった。

この頃、ガラガラ煎餅というのを好み、同時に玩具のお金を溜めて父親の罪を許してもらおうと考え、祖母に諫められる。

▼1860(万延元)年 6歳

3・17 弟、鐮藏出生。

せき子、井伊大老横死の報を聞き、句を詠む。

この頃より、漢籍を父に、和歌を同藩の大野鏡光尼に学び、漢詩も作り始める。

▼1861(文久元)年 7歳

前年より、せき子、平尾家の蔵書を片っ端から読み始め、それを実行に移そうと試みた。時に、逸話を真似て奇異な行動に走り、家人に叱責される。

家財を売り食いするような状況に陥る。

11・30 徳川家茂、征夷大將軍、内大臣に任じられる。

3・26 江戸大火。(青山、広島藩下屋敷より出火)

6・28 幕府、神奈川・長崎・箱館で、英米露仏蘭との自由貿易を許可する。

10・18 へボン夫妻、神奈川に来航。

10・19 佐藤一斎没。

9・11 橋本左内、吉田松陰ら死罪、他多くを処刑。

11・11 江戸城、本丸焼ける。

嘉永・安政年間にかけて寺子屋開設、最も隆盛。

2・4 咸臨丸、品川から米国へ出発。(福沢諭吉↓5・6帰国)

2・26 オランダ商船長ら横浜で殺される。

3・3 大老井伊直弼、水戸浪士らに殺害される。(桜田門外の変)

10・18 条約破棄を条件に、皇女和宮降嫁の勅許。

10・ 英仏連合軍北京占領。(北京条約へ)

11・ 露、清と条約を結び、沿海州を領有。

2・3 露軍艦、対馬に基地を設けようとする。(対馬事件)

4・12 米、南北戦争起こる。

5・1 グラバー商会、設立。

5・7 幕府の長崎製鉄所、落成式。

▼ 1862(文久2)年 8歳

この頃、せき子、父の身代わりになることを考えながら過ごす。

小さな糸車を造ってもらい、糸を繰りながら、本を読む術を覚える。

9・9 重陽の節句(九つの祝い)をささやかに祝う。

この年、「冬河」という和歌短冊あり。

▼ 1863(文久3)年 9歳

この頃、父から小太刀の型と、遠縁の老人から柔道の型を習う。

9・ 水戸の勤皇の志士たちが平尾家を訪ねてくる。

この頃、裏合わせの隣家に太平記の輪読に通う。

この年、二十一首の和歌短冊がある。

- 7・10 露艦長、対馬藩へ土地租借など十二箇条の要請書提出。
  - 8・17 前年のオランダ人殺害事件で、幕府、償金の支払いを受諾。
  - 8・28 英艦二隻、対馬へ赴き、露艦退去を要求。
  - 9・29 幕府、横浜に英学校と漢字所を設立。
- この年、諸国で農民の暴動、打ちこわし、強訴など起こる。

- 1・1 著書調所から『官版バタビア新聞』発行。
- 1・22 遣欧使節、品川から出航。(福沢諭吉、福地桜痴ら)
- 2・13 老中安藤信行、水戸浪士に襲われる。(坂下門外の変)
- 3・11 将軍家茂、和宮との婚儀。
- 5・6 土佐藩、吉田東洋、土佐勤皇党に暗殺される。
- 5・21 島津久光の命により、尊皇攘夷派が暗殺される。(寺田屋騒動)
- 6・6 幕府、英外相との間にロンドン覚書を調印。
- 7・6 萩藩、公武合体論を尊皇攘夷に方針転換。
- 9・14 島津久光の行列を横切った英人切られる。(生麦事件)
- 11・2 幕府、長崎からオランダに留学生(榎本武揚、西周ら)を派遣。
- 12・22 将軍家茂、幕議で攘夷勅旨の遵奉を決定。
- 1・28 朝廷、国事御用掛を設置。
- 2・6 幕府、陸・海軍総裁設置。
- 6・24 老中小笠原長行、各国に三港閉鎖を通達、独断で生麦事件の償金を支払う。

▼ 1864 (元治元) 年 10歳

父、信左右衛門、謹慎を解かれる。

原田文嶺を知新館儒員に招く。

父、信左右衛門、知新館に出役となる。

せき子の袴ぎの祝をする。

この年、一冊の和歌詠草と十六首の短冊がある。

▼ 1865 (慶応元) 年 11歳

この年、三十七首の和歌短冊がある。

6・ 萩藩、米商船・仏軍艦・蘭軍艦を砲撃。(下関事件)

6・27 井上馨、伊藤博文ら萩藩士五人、英国へ密出国。

7・16 米軍艦、下関砲台を砲撃。

7・21 萩藩士高杉晋作、奇兵隊を編成。

8・15 英艦隊七隻、鹿児島湾に侵入。(薩英戦争)

9・21 米、英と合わせて、上海に共同租界を設ける。

9・30 公武合体派、宮中クーデタを実行。(八月十八日の政変)

10・11 幕府、洋書調所を開成所と改称。

11・9 鹿児島藩、生麦事件を解決。

11・24 生野の変失敗。朝廷、攘夷令を改める。

6・1 太平天国、洪秀全、自殺。

6・24 幕府、海軍操練所をおく。

8・12 佐久間象山、京都で暗殺。

8・19 萩藩兵ら、御所を襲撃、幕軍と戦って敗れる。(禁門の変)

8・20 禁門の変により、京都兵火に焼ける。

9・5 英米仏蘭連合艦隊、下関砲撃、占領。同14、講和条約締結。

10・22 幕府、四ヶ国代表と下関事件賠償に関する約定調印。

11・2 萩藩、幕府へ恭順の意を示し、服罪。

この年、ヘボン夫人横浜に女塾を開く。

幕府、洋学者(加藤弘之、福沢諭吉など)を直参に抜擢。

4・9 米、南北戦争終わる。

▼ 1866(慶応2)年 12歳

この年、二十七首の和歌短冊がある。

▼ 1867(慶応3)年 13歳

3・ 父、信左右衛門、高田の東條琴臺を訪ね、見舞う。4月帰着。

春 下田猛雄一行が、武者修行と称して岩村に滞在。藩士に剣道を

4・17 鹿兒島藩士五代友厚、森有礼ら十九名、密かに英国へ  
出航。

7・ 幕府の露留学士六名、箱館を出航。

8・15 坂本龍馬ら、京都で薩長間を周旋。

8・23 幕府、仏公使の勧めを入れ、パリ万博への参加を決定。

11・4 英米仏蘭連合艦隊、兵庫から条約勅許を要求。

11・22 天皇、条約は勅許、兵庫先期開港は不許可との勅書。

1・28 江戸浅草・本所大火、雷門焼失。

3・7 坂本龍馬の周旋により京都で薩長提携密約成立。

5・ 幕府、石川島造船所で日本人設計の蒸気軍艦建造。

6・14 普墮戦争始まる。

7・10 米価騰貴により江戸で窮民暴動多発。

7・18 幕府、第二次征長の役。

8・29 將軍家茂(21歳)、大坂城で急死。

9・ 英公使パークス、連合艦隊への賠償金に代えて、燈台八カ  
所、燈明船二カ所の要求。

12・2 幕府、中村正直ら十二名、英へ留学のため横浜出航。

この年より明治二年まで連年大凶作。(幕末三大飢饉)

明治天皇(2・13―) 十五代將軍慶喜(1・10―)

1・3 徳川昭武、幕命により、パリ万博参加のため横浜出航。

1・10 慶喜、征夷大將軍、内大臣となる。

教え、信左右衛門に文学を学んだ。

8・25 藩主乗命、奏者番となる。

11・3 藩主乗命、陸軍奉行となる。

11・21 岩村藩、謹慎中だった岩松毅に京都の情勢を視察するように内命を下す。

12・20 岩松、岩村へ帰着。維新の大号令を報告。

▼ 1868 (慶応4 || 明治元) 年 14歳

1・ 藩主乗命、願いにより、陸軍奉行を免ぜられる。

1・27 岩村藩、東征東山道先鋒総督兼鎮撫使石倉貞定が藩境に臨んだに際し、陳謝する。

1・29 藩主乗命、江戸を発して帰城し、朝廷に対し謹慎する。

2・ 岩村藩、新政府軍に帰順し、東山道鎮撫使に従う。

父、信左右衛門、岩村藩の勤皇周旋のため、名古屋に出役。

4・ 藩に帰着。

4・13 岩村藩議行局より信左右衛門宛「不埒に付隠居被仰付」

5・2 不審の筋ありとして御預け謹慎被仰付けらる。

1・30 孝明天皇(37歳)、崩御。

2・13 睦仁親王踐祚、関白二条斉敬摂政。

2・27 福沢諭吉、幕府の軍艦受取委員として渡米。

3・4 幕府、幕臣の子弟で八歳以上の者は、昌平坂学問所に就学するよう布達。

4・1 パリ万博開会。

6・23 薩長土藩士らによって討幕運動が計画される。

7・23 龍馬、西郷ら、大政奉還の盟約結ぶ。

7・15 長崎、浦上のキリスト教徒六十八人を捕らえる。

11・8 岩倉具視、鹿兒島藩に討幕の密勅を手交する。

11・10 徳川慶喜、大政奉還を上奏し、勅許される。

12・10 坂本龍馬、中岡慎太郎、暗殺される。

明治天皇 有栖川宮熾仁総裁 ↓ 三条実美、岩倉具視輔相

1・3 王政復古の大号令。

1・27 鳥羽伏見の戦、戊辰戦争起こる。

2・8 王政復古を各国公使に通告。

2・10 新政府、官制(三職七科)を發布。

2・18 英・米・仏・伊・蘭・普六国、局外中立を宣言。

3・2 有栖川宮、東征大総督となり、東海・東山・北陸三道軍を指揮。

3・5 徳川慶喜、上野寛永寺に蟄居。

4・4 新政府、京都に学習院復興を決定。(大学寮代 ↓ 漢学所)

8・ 藩主乗命、京に上り、勤皇の誓詞を奉った。  
この年、父、信左右衛門、名を録藏と改める。

▼1869(明治2)年 15歳

- 2・ 岩村藩、版籍奉還する。
- 3・15 御一新大赦の恩典に与りたき旨陳情。  
明治新政府の設けた弾上白が中山道を巡行すると聞き、せき子、祖母より直訴の書面を預かり、自決の作法を教えられる。
- 9・ 中山道の大井宿に泊まった巡察使が、せき子の短冊を所望し

- 4・ 福沢諭吉、授業料制度を設けて慶應義塾と名付ける。
- 4・5 西郷、勝会談。新政府、神祇官再興。
- 4・6 五箇条の誓文公布。
- 5・22 英公使パークス、天皇へ信任状を提出。(新政府承認一号)
- 6・22 奥羽越列藩同盟成立。(三十三藩)
- 7・4 新政府、新紙幣(太政官札)五種発行。
- 8・14 新政府、旧幕府の医学校復興。同17、昌平学校復興。
- 8・ 築地ホテル竣工。(最初の洋館) 加藤弘之『立憲政体略』発表。
- 9・3 江戸を東京と改称。
- 10・8 新政府軍、会津若松城総攻撃、会津藩降伏。
- 10・12 明治天皇、即位の大礼。
- 10・23 明治と改元。一世二元の制。
- 10・27 新政府、旧幕府の開成所を復興。
- 11・4 天皇、東京に到着。江戸城を皇居と定める。

三条実美輔相

- 1・1 新政府、築地に外国人居留地設置
- 3・2 薩長土肥の四藩主、版籍奉還を上奏。新政府、諸道の関門廃止。
- 3・6 御代始の歌御会始の式行われる。(歌会始の復興)
- 3・17 府県に小学校設置を奨励。
- 4・3 新政府、外国官に通商司(外国貿易事務管理)を設置。

て使いをよこす。

11・ 高田の祖父、東條琴臺(75)、謫居生活から解放され、一家上京

して池之端高田侯藩邸に住む。

12・ 錦藏宛、岩村藩行政庁より補五等辞令。

晦 父、録藏、謹慎解かれる。

この年、録藏、隠居仰られる。

▼ 1870(明治3)年 16歳

6・ 父、録藏、神祇官附屬宣教師養成の制の選に入り、上京する。

本所花町旧藩主松平邸内に居住。

7・ 祖父、琴臺、「聖世紹胤録」を著す。

9・ 琴臺、神祇官宣教師少博士に任ぜられ、まもなく、権中講義に補

せられる。録藏、平田鉄胤に入門し、皇学修行を始める。

10・ 録藏、宣教師・史生に召される。

12・ 録藏、岩村藩庁へ「国許より家族呼寄せ度御願」を出す。

岩村藩庁より、錦藏宛、四書五経素読相済候褒状。

4・ 新政府、東京遷都。

6・27 政府軍、五稜郭総攻撃、榎本武揚降伏。(戊辰戦争終わる)

7・25 諸藩主の版籍奉還を許し、知藩事(二七四人)に任命。

8・6 招魂社創建、戊辰戦争戦死者祀る。

8・15 政府、大学校設立、昌平学校を中心に開成・医学校は分局。

官制改革(神祇官・太政官の二官六省・集議院・開拓使等)

8・29 英国王の第二王子エディンバラ公来日。(最初の国賓)

9・6 英公使パークス、樺太が露領となる危険性を指摘。

10・6 集議院の議事、初めて開く。

10・ 西園寺公望、自邸に家塾立命館(後の立命館大学)を開く。

10・22 海軍操練所を築地に設立。(後の海軍兵学校)

11・8 皇后、京都を発ち、陸路東京へ向かう。

(和歌)八田知紀『白雲日記』

1・26 東京・横浜間に電信開通。

1・ 政府、浦上キリシタン三千人余を捕らえる。

長崎駐在の各国領事、新政府のキリスト教弾圧に抗議。

2・3 大教宣布の詔。

2・ 大学規則、中小学規則を制定。ドイツ医学採用の方針決定。

3・6 華族のお齒黒、点眉を禁ず。

6・26 集議院開院。戸籍編製の準備に着手。

7・6 小学校を東京府六カ所に開設と布達。

▼ 1871(明治4)年 17歳

- 1・ 琴臺著「聖世紹胤録」発禁。
- 4・8 父の後を追って岩村出生。従者2名と共に上京の途に上る。
- 4・9 夜、岡崎の母方、武久家に着く。
- 4・20 三島を発って箱根山を越える。
- 下 父のいる岩村侯藩邸に入る。
- 4・27 歌人、加藤千浪を訪ねる。
- 6・ 祖父、琴臺の教えを受ける。読書や学事に直接接触れることなく、日常の家事や立居振舞から学ぶ。
- 7・ 下田猛雄、東京に出る。
- 橘正国から三代調鶴集、八代集抄を贈られる。
- 7・ 岩村藩、廃藩に至る。
- せき子、八田友紀に入門する。
- 8・ 父、録藏、神祇官廃止により、宣教掛を解かれ、帰藩被仰付。

- 7・19 普仏戦争始まる。
  - 8・24 政府、普仏戦争に関し、局外中立を宣言。
  - 8・ 加藤弘之「真政大意」発表。
  - 9・4 仏、共和国を宣言。
  - 9・20 伊、統一完了。
  - 9・28 東京府下に中学校を開設を布告。
  - 10・26 兵制統一。海軍は英式、陸軍は、仏式と布告。自転車輸入。
  - 12・12 工部省をおく。
  - 12・25 西周、家塾育英舎を開く。
- 三條実美太政大臣
- 1・18 ドイツ帝国成立。
  - 2・23 境内を除き、寺社領上地。
  - 3・14 郵便規則を定める。
  - 5・22 戸籍法を定める。
  - 6・27 新貨条例を定め、円を単位とする。(日本最初の金本位制)
  - 7・1 神社の社格を制定。
  - 7・17 元田永孚、宮内省に出仕、侍読を担当。
  - 8・24 刑部省・弾正台を廃し、司法省を置く。
  - 8・29 廃藩置県の詔。
  - 9・2 大学を廃し、文部省を置く。同5、東校・南校、文部省直轄。
  - 9・13 太政官制を改める。三條実美、太政大臣就任。
- 日清修好条規締結。

▼ 1872 (明治5)年 18歳

- この頃、せき子、八田友紀より詠草の批評を受ける。
- この頃、父、録藏、下谷羅卒(警察官)の屯所に出講し、漢学を教授する。下田猛雄と再会する。
- 5・ 平尾家、本所三笠町へ転居。
- 8・ 琴臺、亀戸天神の宮司となる。
- 10・ 19 宮中に出仕。宮内省十五等出仕に補せられた。
- 宮内省辞令は10月23日付。
- 12・ 10 父、録藏より書簡。奉公の心構え、仙台で木材の伐採に従事している下田猛雄との連絡確件。
- 12・ 皇后より、詠歌を奉り、御感にあずかり歌子の名を賜る。
- 爾来、平尾歌子と改名する。
- 10・ ? 録藏、岩村藩庁へ再度「国許より家族呼寄せ度御願を出す。
- 10・ せき子、絵師河野栄倉について絵を学び、団扇や扇子に花鳥を描いて家計を助ける。
- 12・ 家族、すべて上京。
- この頃、父の漢学教授と書籍等売って、細々と暮らす。

- 9・ 22 神祇官を改め、神祇省に降格する。
- 10・ 7 華士族と平民の結婚許可。同12、穢多、非人の呼称廃止。
- 10・ 20 田畑勝手作を許可。
- 11・ 20 岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文らを欧米に派遣。
- 文部大丞田中不二麿、岩倉に随行して欧米へ教育事情を視察。
- 11・ 24 大蔵省、新紙幣発行と旧紙幣との兌換を布告。
- 12・ 23 津田梅子ら女子留学生、アメリカ留学。
- 12・ 県知事を県令とし、全国の県を改廃。
- 1・ 5 府県の学校を文部省に移管。
- 1・ 14 東京長崎間に郵便開始。(九十五時間)
- 2・ 4 東京裁判所を司法省におく。(裁判所設置のはじめ)
- 2・ 外人女教師による共立女学校設立を定める。
- 3・ 4 滞米中の岩倉具視、米大統領グラントに謁見。
- 3・ 福沢諭吉「学問のすゝめ」初編発表。
- 3・ 9 全国戸籍調査。(壬申戸籍)
- 3・ 23 土地永代売買の禁を解く。
- 4・ 5 兵部省を廃し、陸軍省、海軍省をおく。
- 4・ 20 天皇、東校に行幸。(学校への行幸初め)
- 4・ 21 神祇省を廃し、教部省をおく。
- 6・ 28 天皇、中国・四国・九州の巡幸に出発。

▼ 1873(明治6)年 19歳

- 7・4 文部省、東京に師範学校を設立。
- 8・22 参議西郷隆盛を陸軍元帥とし、近衛都督を兼ねさせる。
- 8・28 集議院建白規則制定。
- 9・5 学制を頒布。(国民皆学を期する)
- 10・14 新橋・横浜間鉄道開業式。(日本最初の鉄道)
- 11・17 文部省に教科書編成掛をおく。同25、教部省を文部省に合併。
- 12・5 岩倉具視、英国女王に謁見。
- 12・9 太陽暦の採用により、旧暦三日を明治六年一月一日とする。
- 12・15 国立銀行条例。神武天皇即位の年を紀元とする。
- 12・28 徴兵の詔書。
- 1・10 徴兵令を制定。
- 1・18 妻・妾以外の婦女が分娩した子は私生児として取扱い、相手男子の認知しない場合、その婦女に養育の責任があることを定める。
- 2・24 キリスト教解禁。
- 3・3 皇后、お齒黒をはぎ、眉墨を落とす。
- 3・7 神武天皇即位日を紀元節と改称。
- 3・14 浦上ギリシタン一九三八人釈放指示。外国人との婚姻を許可。
- 3・20 天皇、断髪する。
- 3・ 師範学校編《小学読本》《小学算術書》

4・ 歌子、宿下がりを許される。

5・5 皇居炎上。「皇居炎上後の控」を書く。

せき子幼少の著作三部の内、その二「忠孝」株松」とその三「源流及蝦外伝」を焼失する。

5・ 平尾家本所南二葉町より本所柳原二丁目へ転居。

10・4 下田猛雄書簡。仙台での近況など。

10・25 歌子、皇后のお供で濱御殿へ陪席する。

陪従記「濱御殿に候して」

12・5 十三等出仕、御書籍掛を拝命。

4・ 師範学校附属小学校授業開始。(師範付属の初め)

5・1 ウィーン万国博覧会開く。(出品)

5・3 太政官制改正、参議の職権強化。東京外国語学校教則を頒布。

5・5 皇居、および太政官・宮内省庁舎炎上。赤坂離宮、仮皇居。

5・15 妻の離婚請求の道ひらく。

6・11 国立第一銀行設立。

6・ 師範学校、生徒全員寄宿制を採用。

7・28 地租改正条例を布告。

7・ 文部省、チェンバースの百科全書翻訳版、刊行開始。

9・1 八田知紀死去。

9・13 岩倉全権大使二行、欧州より帰国。

9・ 元田永孚、へ君徳輔導の上行を起草し、岩倉具視に提出。

10・9 天皇、開成学校で体操を天覧。

10・ 西郷隆盛の朝鮮派遣をめぐつて政府内分裂する。

11・10 内務省設置。

12・1 郵便葉書と封筒発行。

12・9 皇族は陸海軍に従事すべきことを定める。

この年、徴兵令反対の農民騒擾が頻発。

開成学校の米人教師、初めて野球を紹介。

1・4 歌始めを行う。(以後恒例)

1・15 東京警視庁をおく。

▼1874(明治7)年 20歳

4・ 祖父、東條琴臺(80歳)、勝海舟の「尚齒會」に招かれる。

5・ 歌子、宿下がりを許される。

▼1875(明治8)年 21歳

琴臺、教部省十等出仕に補せられ、考證掛を拝命。  
歌子、皇后のお供で洗心亭に陪席する。  
陪従記「洗心亭に陪して」

- 春 祖父、琴臺、眼疾を患う。
- 5・ 平尾家、本所小泉町へ転居。
- 5・14 宮内省十二等出仕。
- 5・27 歌子、病気のため宿下がり。――10・10
- 6 平尾家、本所相生町三丁目へ転居。下田猛雄同居。
- 6・25 権命婦に任じられ、竹命婦の名と香合を皇后より賜る。
- 7 琴臺、失明のため亀戸天神の宮司を辞職。
- 9 錦藏、宮内省十等出仕、侍従試補になる。
- 11 歌子、皇后に供奉して女子師範学校開校式に参列。
- 11・29 平尾家、永田町の高崎邸内へ越す。
- 12 下田猛雄、赤坂仲之町へ転居。

- 1・17 板垣・副島・後藤・江藤ら八人、民撰議院設立建白書提出。
- 1・21 露臨時代理公使、千島樺太交換を提議。
- 2 江藤新平ら佐賀士族の暴動。(佐賀の乱)
- 清との間に台湾問題。
- 3・13 東京に女子師範学校を設立。
- 3・15 ベトナム、仏の保護国となる。
- 10・31 清国と台湾問題の條款に調印。
- 五姓田芳柳、明治天皇の肖像画を描く
- 1・21 北海道に屯田兵を創設。
- 1・27 英仏公使、横浜駐屯軍隊の引揚を通告。
- 2・20 酒類税則、車税規則を制定。
- 4 元老院・大審院・地方官会議を設置。
- 4・14 漸次立憲政体樹立の旨の詔書。
- 5・7 露と樺太・千島交換条約に調印。
- 6・1 東京気象台設立。
- 6・28 反政府運動取締のため、讒謗律、新聞紙条例。
- 8 福沢諭吉「文明論之概略」
- 9・20 江華島事件(朝鮮江華島守兵と交戦)
- 9 森有礼、商法講習所(後の一橋大学)設立。
- 10・2 日露間に千島列島讓渡式。
- 11・1 三菱商船学校(東京高等商船)設立。
- 11・29 新島襄、同志社英学校(後の同志社大学)設立。

▼ 1876(明治9)年 22歳

- 3・ 下田猛雄、赤坂仲之町より、永田町三丁目の平尾方へ転居。
- 6・2 歌子、明治天皇が東北御巡幸の途につかれた際の扈從の記「」」發輦のあした」を記す。
- 6・ 歌子、命婦十等に昇進する。
- 父、鑓藏の医師宛書簡に、歌子が昨年と同じような症状であり、宿下がりをおさせたいので、よろしく周旋を願上候とある。
- 7・ 歌子、宿下がり。
- 8・ 箱根御用邸に赴く皇后に従う税所敦子とのしばしの別れを惜しんだ「楓のもとを離れて」を記す。
- 秋 「御苑の楓鑑賞に伺候し、「御苑観楓伺候之記」を記す。
- この年、高崎正風、宮中御歌掛を拜命。

▼ 1877(明治10)年 23歳

- 1・ 祖父、琴臺、栄次郎へ、家督譲渡証書を書く。
- 春 歌子、西南の変の折り、「寂しき宮居」を記す。
- 5・ 歌子、宮中より、数回にわたり下田猛雄宛には成り行きを待つようにという内容、家族へは御所を下がる打ち合わせの書簡を送っている。
- 8・ 歌子、祖父、琴臺の見舞いのため宿下がり。

- 2・26 黒田清隆、朝鮮国と日鮮修好条規に調印。
- 3・28 帯刀を禁止。(廃刀令)
- 4・4 天皇・皇后、岩倉邸で謁見。
- 6・2 天皇、東北巡幸に出発。
- 7・1 私立三井銀行開業。
- 7・5 新聞・雑誌等の国安妨害のものは、発行停止と定める。
- 8・5 金禄公債証書発行条例を定める。
- 8・14 札幌学校(札幌農学校)開設。
- 9・ (和歌)高崎正風編『埋木廻花』
- 10・ 熊本、神風連の乱。秋月の乱。萩の乱。千葉の乱。
- 11・3 宮中雅楽師、洋楽演奏。
- 11・14 東京女子師範学校に幼稚園設置。
- 製糸業好況で、女工増加。
- 1・4 地租軽減の詔。同24、天皇、関西巡幸に出発。
- 1・30 朝鮮との釜山港借入条約に調印。
- 2・15 西郷隆盛、兵を率いて東上、熊本城を包囲。(西南戦争)
- 4・12 開成・医学学校を合併。東京大学発足。
- 東京英語学校を東京大学予備門と改称。(後の第二高等学校)
- 4・24 露土戦争始まる。
- 5・1 博愛社(後の日本赤十字社)創立、西南戦争の負傷者救護。
- 6・1 万国郵便連合条約に加入調印。

▼1878(明治11)年 24歳

- 4・ 平尾家、飯倉片町に引越す。下田猛雄同居。
- 5・ 歌子、宿下がり。
- 7・ 岐阜岩村より東京へ平尾家戸籍を送籍する。
- 9・26 祖父、琴臺、浅草区鳥越町旧武州忍藩邸内の僑居にて逝去、行年八十四歳。
- 9・27 谷中の天眼寺で神式の葬式を執り行う。
- 12・ 平尾家、家作普請中。
- 12・23 録藏隠居し、錫藏に家督相続させる。

- 8・21 第二回内国勸業博覧会、開会。(11・30、入場者四十五万四六六八人)
  - 8・ コレラ上海から上陸、全国に蔓延。(罹病者一万三八二六八)
  - 9・6 宮内省に天皇常時輔導の侍補局をおく。
  - 9・24 西南戦争終結。(西郷自刃)
  - 10・17 華族学校(学習院)開校、天皇臨席。
  - 11・7 東京一致神学校(明治学院)創立。
- この年、国庫に正貨の準備なく、紙幣の信用低落、物価約二倍。

- 1・20 東京府勸工場開設。
- 4・15 工部大学校開校式。
- 5・1 パリ万国博覧会に参加。(11月)
- 5・14 大久保利通暗殺。(紀尾井坂の変)
- 5・16 佐々木高行、元田永孚ら、侍補の国政参画要請。
- 5・27 貿易通貨の一般通用を許可する。
- 6・1 東京株式取引所開業。
- 7・22 郡区町村編制法を定める。
- 8・23 近衛砲兵隊、不満により大隈邸などに発砲。(竹橋騒動)
- 9・7 東京海上保険会社(後の東京海上火災保険)設立出願。
- 9・10 公立学校の開設認可権限を地方官に委譲。
- 11・2 英外相、条約改正に際し、工業保護のために企画する関税の増加には同意できないと通告。
- 12・19 文部省、東京大学に学位授与権を与える。

▼ 1879 (明治12)年 25歳

- 1・ 歌子、宮中歌会始御会勅題「新年の祝言」を詠じ、入選。
- 2・ 下田猛雄、録藏とともに練養学舎開業。
- 8・ 下田猛雄、練養学舎廃業。
- 10・ 歌子の和歌、篠田等亭編『明治英名百詠撰』に収録。
- 11・20 歌子、病気のため、宮中奉仕を拝辞。

- 1・15 東京学士会院発足。(会長、福沢諭吉)
- 2・ 東京法学社(後の政法大学)創立。
- 3・13 東京女子師範学校、第一回卒業式。(卒業生十五人)
- 3・14 松山にコレラ発生、全国に蔓延。(死者十万余)
- 4・4 琉球藩を廃し、沖縄県をおく。(清国抗議)
- 6・4 招魂社を別格官幣社とし、靖国神社と改称。
- 6・ 元老院の依頼により、高橋由一が天皇を、五姓田義松が皇后を、荒木寛敏が皇太后の肖像画を油絵で描く。
- 7・8 前米大統領グラント、岩倉具視邸で謁能、同10、天皇と会談。
- 7・15 英公使、日本政府が連合談判の基礎となる条約案を提出するまでは、条約改正交渉に応じない旨、申し入れ。
- 8・ 天皇、元田永孚を通じ「教学聖旨」を示す。
- 9・29 学制を廃し、教育令を制定。
- 9・ 伊藤博文、「教育議」を出して「教学聖旨」批判。元田永孚、「教育議附議」で反批判。
- 10・7 文部省に音楽取調掛設置。
- 10・13 侍補制度を廃止。